

私は昨年、機会があつて「自然保護（環境保全）と理科教育」について仕事をしました。この仕事を通して、自然保護には厳格な法や、裏付となる学問も必要だが、

幅広い教育をおして、小さいときから自然保護を基盤とした新しい自然観が身につくように、子供を育成することが大切であると、改めて思い知らされました。

しかし、ただ一つのぬきがたい決定的ともいえる問題が残つて、いまでも苦悩しています。それは「人間の知恵とは何か」という問題です。

今日、各方面から自然保護が強く叫ばれているそのわりには、国民の意識や行動が利己的な範囲から抜けず、絶えることのない人間の知恵が、飽きることのない私欲のためのものでしかないと思われからず。

人間は他の生物にくらべて、いつも他の所有量と比較し、無駄をしてまで必要以上に物をほしがります。

たとえば都会生活者は、一時の憩いの場を自然に求めるのはよいのですが、つぎつぎと自然を破壊し都市化しては、愚かにも人間回復をする憩いの場を失っています。

人間の知恵とはなにか



石野道男

したがって、人びとは北海道の自然が広大で、しかも特有な景観があれば、一層これを自分のものとしてほしがり、またしても思うまま気ままに、結局はどこにでもあるような都会を持ち込むでしょう。

こうして全道の自然が、ありきたりの都市化をしたとき、人びとは他の土地にまた自然を求め、北海道の破壊された自然を捨てて顧みないでしょう。このように人間が自然を売買して私欲を満足させる商品であると考え、いたし方ないこととしてこの愚行はやまないので。

昨秋、婦人技術者と科学者の国際会議で、ガーナの婦人から「未開発国に公害を持ち

込まないでほしい」と

いう話が評判になったといひます。公害と自然保護とは問題を別にして考えるべきで混

乱させてはいけません

が、北海道以外に住む

者であっても、わが国で残された北海道の自然に不必要な破壊を持ちこまないでおきたいと思ひます。これは、先に述べた利己的な意味ではありません。

自然破壊による私欲の満足が、いかに空しいか知ったもの示唆として聞いてほしいのです。

人間の知恵は利己的欲望を自制する知恵まで持たない限り、自然保護はできないと思ひます。

人類生存のため自然保護を実行に移さねばならないとき、人類が自ら名付きた *Homo sapiens*（人間）知恵あるもの *V* という名を *Homo stultus*（人間）愚かなもの

の *V* としてはなりません。

子供の教育に直接仕事をする者にとつて、大人が私欲の自制を知恵の敗北だと思ふかのように、自然や環境をほしのままに破壊し、法は知恵でぐり抜け、自然保護は利己範囲をこえないことを恥じなければなりません。

大人がおこしている交通戦争に、子供たちは本来勉むべき内容のほかに交通安全教育をさせられています。このように大人が責任をおうべきことを、つぎつぎに「子供のために」と教育の場にもち込まれるのは、教育の本質は蚕食されてしまひます。

「自然保護はどうあるべきか」という問題を考え、実行しうる人間を育てるための教育は交通事故から身をまもる教育とは次の差があり、今後人類が生きてゆく限り教育の本質となるでしょうが、それにして大人は、子供たちが今後大人の破壊してしまつた自然でしか生きなければならぬことに思いをいたし、人間の知恵が利己的範囲でしか意識や行動ができないのでは、自然保護は達成されないのでしよう。

（神奈川県立教育センター）